

リエージュ司教領布教録 Tuez—les tous, Dieu reconnaitra les
siennes

手紙

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

存在Xは、あの男が容易に改心しそうなことを悟った。試行を重ねるため、新たな不信者へ対話を試みたところ、意外にもすぐに神の存在を信じる。あの男に好影響を与えるため、そして更なる信者を増やすため、戦火の世界へ放り込まれた信者はしかながら。狂気的な行動により、何故か信者を減らしていつてしまうのであった。／w
e b 小説、アニメ準拠

目次

プロローグ	1
第一話	4
第二話	7
第三話	10
第四話	12

プロローグ

「リエージュ司教様、並びにご息女マリア様のご入場です」

高らかに、そして荘厳に。

重厚な扉は開かれ、舞踏会の開催を告げるべく、音楽が鳴り響く。

主役然として現れたのは、1組の親子だった。

一人目。

煌びやかな祭服に身を包んだ中年の男。リエージュ司教である。見る人によつて、人がよさそうか気弱そうか判断はわかれそうな面持ちであったが、足取りは堂々と赤絨毯の上を進んでいる。

2人目。

先の男にエスコートされた、うら若き乙女である。上品な佇まいは、上流階級そのものである。

笑んだ目は糸目に近く瞳の色はわからなかったが、左の涙黒子は印象の薄いはずの目元にどこか不思議な魅力を宿らせている。平凡な茶髪は、しかし煌びやかな髪飾りに彩られ、光り輝いていた。

2人は慣れた所作で入場し、方々に挨拶をしていく。

帝国が厳しい戦火にある中、今日も社交界は贅の限りを尽くしていた。

私からすると、人生とは栄達と挫折の混合物だった。ついでにいうと、現実味のない世界でもあった。

人並み以上の頭は有った。良くも悪くも、小学校では学校で一番優秀で、其の時は幸せでいられた。私立の進学校に合格した時、初めての躓きを経験した。

進学校において、数多ある小学校で一番程度の頭では、平凡程度の評価しか与えられない。

辛うじて中の下程度にまでは喰い込むことができたが、逆に言えばそれが限界であった。今まで努力をせずともなんとかやってきた人

間が、今更努力などできようはずもなかったのだ。

まあ、内面は屈折している。

なにしろ、小学校で培った高いプライドを満たせぬままくすぶっているのだ。

当然のように、僅かでも自分より劣っている連中を見つけては見下すことで、自分を保ってきた。

何かへの、逃避。

それは、当然のこととして、惹き起こされる。

授業以外の時間はほぼ全て、いや、授業中でさえも。本やゲームなど空想の世界に浸っていた。

そして、通学中。

歩きスマホをしていた学生がホームから転落するのは。果たして偶然だろうか。

気づくと老翁が、こちらを注意深く観察していた。

あたりは一面、白い。

夢か。

「夢ではない」

低くしわがれた声が耳に届く。確かに、夢に音は存在しない気がする。

「そなたは死んだのだ、自らの不注意で線路に転落した」

「…」

死？生の終わり。何もかも終わり。

線路ってことは、電車にひかれたのか。うら若き乙女に相応しくない死体になっただろうな。

しかし、体と一緒に脳もぐちゃぐちゃになったはずなのに、意識はあるものなのか。死んだら消滅するものだと思っていたから、今自分がこうして思考できているのは不思議な感覚である。

「狂った魂め。解脱、涅槃以前に輪廻転生すら信じていないとは」

狂った魂？狂っているかどうかはさておき、私は今魂の状態という

ことだろうか？

「それに、解脱、涅槃……。」

そんなものが実在するのか。ということはもしかして……あなたは神様ですか？

「どいつもこいつも、解脱して涅槃にいたるところか、信仰心のかからすらない！とても六十億の管理など賄えぬ！あの男なぞ言うに事欠いて存在Xなどと嘯きおって。……今、なんと言った？」

神様なんですね。今までの無礼をお詫びいたします。申し訳ありませんでした。

「いきなり殊勝な態度だな……。信仰に目覚めたのか!？」

この目で見て、体験しているんですよ？もちろん信じます。

「しかしあの男は対面した上で悪魔と……！十戒など歯牙にもかかけず」

その人のことはわかりかねますが……。恐ろしさのあまり悪魔といったのかもしれませんが。念入りに殺して輪廻させた方がよろしいかもしれません。

「うむ……。既に転生させている。あの男がいう、信仰を妨げるものがない劣悪な世界にな。つまり、科学の発達していない世界で、女で、戦争を知り、追いつめられる世界だ。予想外の結果であったがそなたにもあの男と同じ世界に転生してもらおう。何か良い影響を与えるやもしれん」

畏まりました。私はその男が改心するよう導けばよろしいのですね？

「そのとおり。ある男、いや今は少女だが、を改心させるのだ。そして、我が信徒を増やすように」

はい。不肖の身なれど、精一杯務めさせていただきます。その少女の名前はなんというのですか？

「……ターニヤ・デグレチャフだ。そなたには準備期間としてかの者が産まれるより少し早く転生してもらう。出自も恵まれたものにしてよう。励むのだぞ」

第一話

気が付くのと、かごのようなものの中で揺られていた。
下にしかれたシーツらしきものは肌触り良く、上等な絹であることがわかる。

目は見えず、わからないが只管な眩しきを感じる。

「Mein allerliebste M・uschen!」

同時に温かい誰かに抱き上げられる。

英語じゃない。アクセントが力強いから、ドイツ語かそれに近い新言語かもしれない。

何はともあれ、しばらくは情報収集に勤しむか。

「マリア、5歳の誕生日おめでとう!」

統一歴1913年とやら。

5歳になりました。有り余る時間にて、謎言語を習得。結局ドイツ語かどうなのかはわからなかったけど、そもそもドイツ語がわからないのだから仕方ない。

ここは、リエージュ司教領ということも判明した。私はマリア・フォン・リエージュで、父はリエージュ司教。おそらく、同じ名前を冠しているのだから領主かその身内かつ、身なりとしても非常に裕福な出自といえるだろう。

今日は朝早くから父と連れ立ってお出かけ中である。かれこれ30分は歩いているけど、広い教会の中はまだ終わりが見えない。

「お父様、どちらに行かれるのですか?」

「今日は君の誕生日パーティーがあるけど、その前に魔力測定を行わなければならないんだ」

魔力。初めて聞く単語だ。

「魔力とはなんですか?」

「うーん、難しい質問だね。まだ未知数の力なんだ、無限の可能性を秘めているともいえるね。今はもっぱら国を守るために使われてるけど、僕はきつと、神の御力に違いないと思うんだ」

未知数……。何かのエネルギーだと推測するけど、個人に備わっているものであれば、電気ではないんだろうな。

気、あるいは魔法に近いものかもしれない。国を守ると言い方が抽象的すぎて使い方がよくわからないけど。

「神の御力なら、私も備えたいです」

「そうだね……。僕にはないけど、産まれた時から信心深い君ならあるのかもしれない」

私は産まれる前から信者だけど、リエージュ司教領においては、会う人全員が信者だ。仮に中身が私でなくても敬虔深い信者になったことだろう。

もちろん初めて話した言葉は H e r r (神)。父は嬉し涙を流した。

「ついたよ。この機械を頭につけるから、そこに座って」

小部屋の扉を開けると、数人の信者に囲まれて、何やら洗脳装置のようなものらしい外見のものが置かれている。

座って大人しくつけられると、辺りに眩い光があふれた。

「素晴らしい。魔力保持量放出量共にAです。マリア様は神に愛されしお子なのでしょう」

周囲の大人の絶賛具合をみるに、なかなか良い結果がでた様子。

しかし、一人が表情を曇らせてもらった。

「しかし、これ程の才能では軍に強制的に徴発されてしまうかもしれません」

「軍？軍事的に価値ある力ということは、人殺しに主に使われているということだろうか。」

あるいは神の御力というくらいだから、治癒の力かもしれない。

「神は人殺しを禁じているのだ、マリアにそんなことはさせられない。リエージュの名にかけてはねのけてみせる」

人殺しの才能だったようだ。父の権力が確かなら、軍行きは免れる

かもしれないが、主より授かった命は、信者しかいないこの司教領では果たせない。

いずれ何とかして司教領からは脱出しなければならぬと考えていたけど、軍に入るのは良い手かもしれない。

それに、ターニヤちゃんもそろそろ産まれたらどうか。ターニヤ・デグ：デグチャレフ？だったっけか。変な名前だな。

とにかく、名前だけで外見も年もわからない少女を探すのは至難の業だ。こちらも早く取り掛からねばなりませんし、課題は山積みだ。

さすがに幼気な少女のままでは軍には入れないだろうから、一先ずは神の御力を使いこなせるようにしなければ。

第二話

「マリア様、これくらいで少し休憩しましょう」

「はい、先生…」

休憩をいいつける教師の顔は優れない。

ありあまる財力を活用し、魔法教育の先生をお呼びしてはや数カ月。教育は遅遅として進まないままだった。

物理、数学、魔力理論史、魔力―人体相関論？

すいへいりーべ、何それおいしいの？関数？そんなのなんの役にも立たないよ。

前世の馬鹿な自分が囁く。

柔軟な子供の頭を持っているはずなのに、持つて生まれた苦手意識が圧倒的に邪魔をしていた。

メイドが入れた紅茶を飲み、頭にかかる靄をなんとか吹き飛ばす。

「なんだか、むいてないですね…。もっところ、ぱーつと、ぐおおーつて感じで感覚的にできたら良いのに」

「マリア様はまだ5歳ですから…。…軍が許容するかわかりませんが、演算宝珠さえあれば、なんとかなるかもしれません」

少し考えこんだ後、教師は提案する。

「演算宝珠？」

「通常、魔導士は単体では簡単な発火や念動力程度しか発動できません。しかし、軍が開発した演算宝珠を用いれば、術式の発動を補助してくれるため、より安定的に、いつてしまえば楽に魔法が使えます」

「すごいです！早速お父様にお問い合わせきます！」

全く、最初からそれを用意しておいてくれたらよかったのに！

「あつマリア様！演算宝珠は軍の機密がつまっていますからそうおいそれとは…行ってしまわれた」

何やら後ろから聞こえたけど、父におねだりするのが先だ。

今の時間なら、執務室だろう。

「お父様！」

「あつマリア様!!」

執務室の前は何やらいつもより護衛が多かった気がしますが、それどころではありません。構わず扉を開けると、背の高い軍人が、父と話している。

「マリア…。ちようどよかった。君の叔父上が遙々来てくださったよ」

振り返った軍人は、顔に刻まれた皺と表情はいかつく、服装と相まって威圧感を与える印象だが、どこか親近感のわく顔をしている。「やあ、久しぶりだな、マリア。覚えているかな?」といっても赤子の頃に会ったきりか。目元が本当に妹にそっくりだな。妹は今も社交界に?」

笑うと更に親近感のわく顔である。

「はい、妻は華やかな場が好きですから。今もお茶会にでています。目元のことをいうなら、妻にもですが、兄上にも似ていますよ」

なるほど、確かに私そっくりの糸目だ。いや、私がそっくりになったというべきだろう。

親近感の正体は目だったようです。

「お母さまの、お兄様ですね?初めまして、マリア・フォン・リエージュです」

習いたてのカーテシーを披露する。

「これはご丁寧に。ハンス・フォン・ゼートウーアだ、レディ。遅くなったが、5歳の誕生日おめでとう。何かほしいものはあるかな?」
「あつ!それならちようど今欲しいものがあつたのです。本当に言ってもよろしいのですか?」

じゅんしよう。奇しくも軍人なら、持っているかもしれない。

「怖いことを言うな。もちろん、私で用意できるものに限るが。言ってみなさい」

笑ってくれたので遠慮なくいってみるとしよう。

「演算宝珠がほしいです!」

叔父の目が見開かれ、その隙に三白眼が覗く。5歳の子供が見たな

ら思わず失禁してしまうかもしれない。

「ふむ……………。良いだろう」

考えこむ様子で、父をちらっと見たが、叔父は約束してくれた。「本当ですか!?!」

奇跡的なタイミングである。正しく主の思し召しだ。

「兄上ー!」

「どれだけ遠ざけようとも、本人が望むのであれば仕方あるまい。幸い、伝手はある。用意してみよう」

どこか面白そうな叔父と対照的に、父は不安げな表情だった。

第三話

演算宝珠の到着を待ちわびて1カ月。

いつもの朝食の席で、父が難しい顔をして侍従から受け取った小包を覗んでいた。

「マリア、よく聞くんだ。君に素晴らしい神の御力が発現したことはとても喜ばしいことだ。しかし、その力を悪いことに使ってはいけない、わかっているね？」

「はい、人を傷つけることには決して使いません」

主の手を煩わせる不信者を人と定義するかは議論の余地がありませんが。

「そうだ、力は善きことに使わなければならない。魔法は戦時下の今、主に人を殺す手段として使われているが、治癒術式も開発されているという。人を救う力を極めなさい、わかったね？」

「はい」

不信者はいっそ一度殺してあげた方が救いになるかもしれないけどね。

まあ、治癒術式の方が何かと受けは良いでしょうし、信者を増やすのにも都合がよいかもしれません。いわゆる、奇跡の具現ですね。

「よし。では、お待ちかねの叔父上からの贈り物だよ。エレニウム95式というらしい。研究責任者が君の年をきいて驚いていたそうだよ。研究中のものでよければ是非と、一つくださったそうさ。父様もよくわからないが、なんでも従来のものに比べて4倍の出力を誇るのだとか。大事に使うんだよ」

エレニウム95式？エレニウムがまず何かわかりませんし、95も何を表しているのかさっぱりわかりませんが、これで私は魔法使いとやらですね。

「はい、お父様！叔父様にお礼のお手紙を書きたいのですが、よろしいですか？」

「ああ。きつと叔父上も喜ぶだろう」

お手紙を書いたら、早速先生と演算宝珠を試してみましよう！

「ドクトル、本当に送ってしまったんですか？まだ試験も行っていない代物を…」

「もちろんだとも。ご息女はまだ5歳ときく。既存の演算宝珠の慣れていない子供であれば、使いこなせる可能性も高い。魔力保持量放出量ともに申し分ないのだ、そう簡単に壊れまい」

「お偉いさんのお子さんですよ？もし爆発なんかして、怪我でもさせたら死刑ですよ！」

「むこうも内密に調達しているのだよ？私の最高傑作だからしてあり得ないだろうが、仮に、もし万が一死んだとしても、訴えることはできないだろうね」

「ドクトル、あなたに良心はないんですか？5歳の女の子ですよ」

「科学の進歩に犠牲はつきものだよ。理論上は運用可能なのだ。君は私の最高傑作が、欠陥品だともいうつもりかね？」

「いいいいえ、まさか！」

「運用データは自動的にこちらに送信されるようにしている。楽しみだな？まあ、司教領息女なのだ。神がいるとすれば、きっと幼気な少女をお助け下さるだろう、Deus lo vult!神がそれを望まれるのならば！」

第四話

「マリア様、落ち着いて下さいね。全てその演算宝珠が補助してくれるはずなので、まずは簡単な切り傷を治してみましよう」

「はい、先生！」

今日は初の魔法演習の日だ。

簡単な治癒術式を、ちようど厨房仕事で指をきった見習いのジエフに施すこととなった。

普段私と会う機会のないジエフは、恐縮しきった様子で立っている。

髪と同じ明るい茶色の目はそわそわと絢爛な室内の装飾を眺め、そばかすの浮いた頬を引きつらせていた。

治癒は専門ではないですが、という前置きはあったが、切り傷は単なる表皮の損傷なので、簡単な治癒促進の術式をかけるだけで治癒するはずだ、というのが先生の説明。

演算は全て宝珠が行ってくれるそうなので、私はただ引き金を引き、魔力を流すだけでよいそう。1+1=2。私が負担する演算はそのレベルであり、失敗するはずはない。

「さあ、指を」

「よ、よろしくお願いします」

先生に促され、ジエフは指を恐る恐る私の前に差し出した。

大丈夫、そんな意図をこめて微笑むと、ジエフも、へらりと笑い返してくれた。

傷に目を凝らせると、薄皮一枚の小さな切り傷は出血もなく、明日にでも塞がりそうな具合だった。

「では、宝珠に魔力を流して起動させましょう」

魔力を流すという感覚野を持ち合わせていないため、全くやり方はわからなかったが、胸につけた宝珠をそつと左手で触ると、熱を持った気がした。

「そうです。では、始めましょう」

これで流せたようだ。

左手に触れる宝珠はどんどん熱くなり、胸は火傷しそうな程だった。光も眩しいほど発している。

間違いなく起動はしているようなので、目を閉じて、集中する。

1+1||2、1+1||2。

何度も念じながら両手をかざす。

光と熱は更に加速し、瞼ごしでも光が焼き付いてくるようだった。

「マリ……さ……やめ……っ！」

何か先生の叫び声が聞こえたような気もしたが、音すらも遠くなくて、よく聞こえない。

これは、もしかして不味いのかもしれない。

けれど、使命を果たすまで主が私を見捨てる訳がない。

「主よ……っ！」

哀れな僕を見捨て給うな。

瞬間、閃光があたりを切り裂き、遅れて爆発音が響いた。

恐る恐る目をあけると、辺りは大惨事としか言いようがない状態だった。

豪華絢爛で可愛らしかった私室は隣の寝室毎見る影もなく、瓦礫と化し、天井は吹き抜けとなつてしまつてゐる。

私は奇跡的に無傷だったが、先生は咄嗟に張つたのか、防衛術式のような障壁が周囲に浮かんでゐるにもかかわらず、煤だらけで服はぼろぼろ、意識も朦朧としてゐるようだった。

間違いなく生きてゐる。明らかな外傷はないが、衝撃で頭でも打つたのかもしれない。

大変なのは、ジエフだった。いや、ジエフだったもの、という方が正しいかもしれない。

爆発を直近でくらつた皮膚はほとんどが熱傷により真皮もしくは筋まで欠損し、浸出液を垂れ流し。衝撃を間近で受けた身体は開放骨折の嵐、特に左腕は吹き飛んでしまつてゐた。

一目で、生きてはいないと他者に悟らせる惨状だった。

「う……あ……」

しかし、その塊は蠢き、小さな呻き声が聞こえた。この状態にもかかわらず、不幸にもまだ意識があるようだった。

この教会で働いてゐるということは、ジエフは、敬虔なる信者であり、生きてゐるのなら、全力を持つて救わなくてはいけない。

何より、この不自然な爆発も主のご意志あつてのことではないだらうか。1+1=2。その程度なら難なくこなせる程度には前世で計算している。間違えようもない。

試練とやらだろうか。

「Kyrie…… eleison!

主よ、哀れみたまえ。

救いたまえ」

突然起きた訳の分からない事態への混乱と焦りは一向におさまらないが。

祈りながら。歌いながら。

自身を奮い立たせ、ジエフに近づく。

方程式、関数！式さえ立てればあとは演算宝珠が計算してくれる。何でもよい、中等教育は済ませてるんだ、死ぬ気でやれば何とかなるかもしれない。

演算宝珠とやらも幸い無傷だ。今度こそまともに働いてもらわなければ。

まずは、全身の骨折だ。公式はなんだっただろうか。

焦りで余計に働かない頭を酷使しなんとか思い出し、骨をつなぎ合わせる事ができた。しかし、この骨をどこに戻したらいいのか？

懐から人体模型図を取り出す。

治癒を正しく行うためには、まず人体の構造を暗記しなければならぬ。

そう言った先生に、時間がある時は眺めて覚えるよう持たされたこれを、お手本にするしかない。

あーでもない、こーでもないと言いつつながらパズルさながらに何とか骨を元の位置らしきとこに戻す。

次は、火傷だ。これはさつきより簡単だろう。切り傷の次に演習する予定だったから、ちゃんと公式も予習している。

範囲は広いけど、真皮、表皮を整復しつつ回復させれば良い。

全身に汗が噴き出すのを自覚しながら祈り続けると、外見上は元通りの皮膚で覆う事ができた。

最後は、左腕だ。料理人の命なのだから、なんとかしてでも元通りにしなければならぬ。

欠損部位の回復なんて術式は習わなかったけど、肩から治癒促進式をかけまくるしかないだろう。

1 + 1 || 2、1 + 1 || 2、1 + 1 || 2!! 折角持つて生まれた魔力量があるんだ、力まかせに何とかするしかない!

左腕が無事生えたことを確認すると、思わず笑みがこぼれた。

疲労感は全身を重苦しく包んでいるが、成功したのだ。

安心すると、治癒に必須といわれていた痛覚の遮断術式とやらを失念していたのに気づいたが、おそらく意識もそこまではつきりしていなかっただろうし、助かったからよいでしょう。

主に栄光あれ、アーメン!

教会併設の病院に、レルゲンはいた。ご息女の教師として招かれた時、まさか爆発に巻き込まれて骨折をするなどどうして思っただろうか。

あの後、ご息女の治療するという申し出を丁重に断り、事故の責任を取り職を辞す旨を伝えた。

火傷と骨折の治療術式は方程式や関数を有する。まだ、ご息女には教えていないはずの術式だった。ましてや、部位欠損の治療術式など、ないはず。

それを、初めての演習で使いこなす。

リエージュ司教領の人々は口々に神の御業だなんだと誉めそやしていたが、これは奇跡なんかで成せる技ではない。確かな知識に裏付けられて初めて行える技だ。

間違っても、5歳の子供が行えるものではない。

それに、そんな才能のある者が、演算宝珠の暴走など起こすだろうか。

ましてや、自分だけは完全に無傷なのだ。そんな奇跡のような爆発を暴走とは言わない。

これは、意図的なものだ。

その思考に陥った時、レルゲンは冷や汗が流れた。
まだ5歳の可愛らしい少女が。何故。

あの爆発の直後、おぼろげながらレルゲンは見ていた。自分が渡した人体模型図を見ながら必死にジエフを治していたご息女の姿を。
そして、この世のものとは思えない苦痛の叫びをあげていた青年を。

痛覚の遮断術式を使っていなかったのだろう。部位欠損すら為せる者が。

聞けば、あの青年は職を辞したらしい。身体は問題なく治癒していたが、怪我を恐れ、包丁を持たなくなったそうだ。

あの微笑みは、どういう意味を含んでいたのか。
彼女の意図はわからない。

しかし。どの推測も、空恐ろしいものだった。